

の序より五帖まで有けるに、なみだ落さぬ人なし、此うち俊明何事にもすべてなかがりければ、
犬目の少將といはれけるぞ、こよひは人にも勝れて、袖をしぼるばかりなり、○下略

〔太平記〕資朝俊基關東下向事附御告文事

冬房謹テ申ケルハ、○中略先告文一紙ヲ下サレテ、相模入道ガ忿ヲ静メ候バヤト申サレケレバ、主

上○後醍醐ゲニモトヤ思食レケン、サラバ懸テ冬房書ト仰有ケレバ、則御前ニシテ草案ヲシテ是ヲ

奏覽ス、君且叡覽有テ、御泪ノ告文ニハラトカ、リケルヲ御袖ニテ押拭ハセ給ヘバ、御前ニ
候ケル老臣皆悲啼ヲ含マヌハ無リケリ、

〔倭訓栞中編六久編六〕くれなるのなみだ。血の涙といふに同じ、又開元遺事に、揚貴妃が故事あり、

〔古今和歌集戀十二〕願えらす

つらゆき

白玉とみえし涙も年ふればから紅にうつるひにけり

〔源平盛衰記九〕康頼熊野詣附祝言事

執行○後ハ御教書取上テ、ヒロゲツ卷ツ披ツ、千度百度シケレドモ、カ、チバナジカハ有ベキナ

レバ、頓テ伏倒絶入ケルコソ無慙ナレ、良有、起アガリテハ血ノ涙ヲ流シケル、血ノ涙ト申ハ、涙
クダリテ聲ナキヲ血ト云トイヘリ、言ハ出サバリケレ共、落ル涙ハ泉ノ如シ、

〔大和物語下〕はじめは何人のまうでたるならんとき、ゐたるに、わがうへをかき申つ、わがさ
うぞくなどをかくすきやうにするをみるに、心もきも、なくかなしき事物ににず、はしりやい
でなましと、千たび思ひけれど、思ひかへりゐて、夜びとよなきあかして、あしたにみれば、みのも
なにも涙のか、りたる所は、ちの涙にてなん有ける、いみじうなけば、ちのなみだといふ物は、有
ものになむありけるとぞいひける、

〔續古事談二〕道方ノ民部卿頭左中辨トテ、位階ノ上臈ニテアリケルニ、ヲノ望ミ申ケルニ、